

家族・恋人・学校・職場……etc 身近な「わがまま」を社会へつなぐ

各氏が 大絶賛!!!

「わがまま」の波紋
広がる!!!

武田砂鉄

(ライター『紋切型社会』)

わがままは決して自己中ではない、と宣言するこの本は、誰かと違う意見を言うことを怖がるな、と伝える。私たちは、わがままの海の中にいる。使いこなさないから溺れてしまうのだ。(「サンデー毎日」2019年5月19日号より)

「権利を主張する」は自己中?

言っても何も変わらない?

令和元年の
話題作!★



ジェーン・スー

(作詞家・コラムニスト『私がオバさんになったよ』)

大人ならサッと飛ばしてしまう「ひとつ手前の話」が、身近な例とともに丁寧に解説されていました。大人だって、本当に十分に理解しているとは言えないのかもしれない。この本を読んで、そう思いました。

星野概念

(精神科医『ラブという薬』)

日々自分が考えていることが、ものすごく分かりやすく、とてもたくさん書かれていました。これ、自分で書いた本だっけ?と思うほど。対象は中高校生だそうですが、大人も、いや、大人にこそ読んでほしい。これは僕の「わがまま」です。

現役高校生

(発売前に読んでくださった学生の方)

親にも読んでほしい。

富永京子 / 定価 1,750+税 / 左右社

岸政彦

(社会学者『断片的なものの社会学』)

理不尽な社会を軽やかに変える
— 「私たちの革命」のレッスン。

宇野重規

(政治学者『未来をはじめ』)

自分も我慢しているから、他人も我慢すべき。そう思っていると、社会は重たくなる。むしろ、自分の不満をちょっと口にして、それをつなげる。気づいてみたら社会運動になる。そのためのヒントに満ちた本です。

安部敏樹

(リディラバ代表『日本につけるクスリ』)

会ったこともない人だが、きっとこの人とは一晩いい酒が飲める。それほど同じことを考えてきたように感じる一冊であった。分断の果ての闘争か、諦めの先にある無気力か。そんな未来を次の世代に残さないために。「わがまま」への寛容を身につける、旅の準備を始めなければ。